

# 最新事情

資格取得と体験学習で実践力を養い、  
 できる社会人<sup>®</sup>になってほしい

## 大阪市立淀商業高等学校

(大阪府大阪市)

大阪市立淀商業高等学校は、創立75年の歴史を誇る商業高校だ。商業科ではさまざまな教育活動を通じて、自分で考え行動できる力の習得を目標としている。資格取得にも意欲的で、「ビジネス教養」では社会で必要とされる知識と常識を身に付けながら、秘書検定の合格を目指す。商業科の取り組みを中心に伺った。

### 就職に強い淀商<sup>®</sup>がモットー

大阪市立淀商業高等学校には、商業科と福祉ボランティア科がある。生徒数は全学年合わせて約720名。約8割が女子生徒のせいか、校内には明るい声が響く。校庭では活発に部活動に励む女子生徒の姿も目立っている。

福祉ボランティア科は、大阪府内の公立高校で唯一の学科だ。福祉に関する専門知識とスキルを3年かけて学ぶことで、介護福祉士の受験資格が得られる。毎年、高い合格率を挙げており、同校から介護福祉士が続々と誕生している。

一方、商業科は卒業後すぐに社会に出る生徒が多いため、ビジネス社会で活躍できるスペシャリストの育成に力を入れている。

「どちらの学科も就職する生徒が多いですが、生徒一人一人の希望に沿った進路が実現できるよう、就職と進学のどちらにも対応できる教育を心掛けています」と話すのは同校の大西敏朗校長だ。

両学科ともに生徒の希望や夢の実現に向けて、さまざまな教育活動を展開しているが、今回は商業科の取り組みをご紹介します。

商業科が目指す教育を大西校長はこう話す。「商業科のモットーは、就職に強い淀商<sup>®</sup>です。内定をもらうだけでなく、就職後、社会で活躍できる人材になってほしいという意味もあります。採用してもらった会社には、『君がいてくれてよかった』と言ってもらえる存在になってほしい。『できる社会人<sup>®</sup>になるためには、ビジネス社会が必要とされる知識と技術を習得し、自ら考え、行動できる力を身に付ける必要があります。そこで資格試験や販売実習などの体験学習を行い、実践力の育成に取り組んでいます。指導の成果もあり、昨年度も就職率100%を達成しました」。

商業科では毎年、7割近い生徒が就職する。残りの3割は、高校での学びを深めたいと、大学や短期大学、専門学校への進学を選ぶ。

生徒が『なりたいたい自分』になれるよう、同科は平成15年度にコース制を導入した。2年生より「会計科学コース」「情報科学コース」「流通科学コース」「コミュニケーション科学コース」に分かれて学ぶ。コース別の選択科目の他に、自由



大阪市立淀商業高等学校。  
 正門付近に植えられた桜が訪れた人を迎えてくれる

(右から)今年3月に卒業した商業科の山口紗也加さん、駒田玖瑠美さん、植田智之さん。三人とも高校在学中に、秘書検定3級と2級に合格。今年の4月に進学し、新たなスタートを切った



大西敏朗校長



(右から)商業科の森山兼忠先生、藤原絵理香先生、末澤篤先生、岡琢磨先生。常に情報を交換し合い、指導に役立っている

選択科目も設けられており、生徒は進路や興味に応じて、好きな科目を履修することができる。

3年生の「課題研究」では「インターネット実習」「カウンセリング入門」「ビジネス・アイデア研究」「電卓マスター」「簿記N」「販売士研究」「ビジネス教養」の七つの講座を展開している。ビジネス社会ですぐに生かせる知識を学べると好評なのが「ビジネス教養」だ。この科目はコミュニケーション科学コースの2年生も選択でき、授業内容は変わらない。お辞儀・名刺交換・来客案内・電話応対・敬語など、新社会

人に求められるビジネスマナーや一般常識を基礎から学ぶことできる。

秘書検定の合格も同科目の大きな目標だ。まず、6月の試験で秘書検定3級に挑戦。合格した生徒は11月の試験で2級に挑戦する(コミュニケーション科学コースの生徒は2年生で3級と2級に挑戦できるため、3年生で準1級に挑戦することができる)。授業がスタートしてから6月の試験まで時間がないため、とにかく過去問題を集中的に解かせている。試験1週間前になると、放課後に補習を行い、不明点や疑問点はそのままにせず、必ず解決できるようにサポートしているという。

### 実践力を習得させるために 受け継がれた指導方法

同科目を担当する商業科の森山兼忠先生は秘書検定について「生徒たちに身に付けてもらいたいマナーが、秘書検定では網羅されている」と話し、導入の経緯を聞かせてくれた。

「秘書検定は、前任の河田博一先生が導入しました。『ビジネスマナーを学んでいる生徒に何か資格を取らせてあげたい』と目を付けたのが秘書検定だったのです。河田先生は、お辞儀の角度が分かりやすいように、イラスト入りのプリントを作成するなど指導に工夫を凝らしていました。美しいお辞儀ができる生徒をビジネス社会に送り出したい。その強い思いを、ビジネス教養の指導に当たる教員皆が受け継いで

います」。

森山先生のほかに、同科目を担当する末澤篤先生と岡琢磨先生は指導についてこう話す。

「昨年度、初めて担当したのですが、指導するに当たり秘書検定を学習してみて、社会人でも意外と知らないことがあるということに気付きました。そこで森山先生に確認したり、河田先生の資料を読むなどして知識を習得しました。生徒に指導する前に、まずは自分が挑戦してみることが大切だと思います。昔から筆記が苦手だったので、祝儀袋の記名に挑戦し、練習したことで克服できました。指導の際、説得力が増します」(末澤先生)。

「学生のころ、ホテルでアルバイトをしていたため、マナーや立ち居振る舞いには自信がありました。しかし、いざ教える立場になるとなかなか難しいもの。生徒に過去問題を解かせ、適当、不適當の理由を説明しなければなりませんから、教員側もしっかりと秘書検定を学ぶ必要がありました。指導を始めた当初は大変でしたが、知識がしっかり身に付いた今では、自信を持って指導できています」(岡先生)。

同科目を履修した卒業生に話を聞いた。植田智之さん、駒田玖瑠美さん、山口紗也加さんは在学中に秘書検定3級と2級に合格した。

「これまで学んだことのない内容で、最初は戸惑いました。しかし勉強を進めるうちに、社会が必要とされる知識や常識を理解できるようになりました。今は秘書検定で身に付けたこと

を生かせる場面は少ないのですが、将来、絶対に役立つと思っています」(植田さん)。

「難しかったのは敬語です。尊敬語と謙譲語が混ざってしまったたり、二重敬語にならないよう意識していましたが、慣れるまでに時間がかかりました。この授業で敬語の基本をマスターしておけば、卒業後、目上の方と接するときには困らないと思います。高校生のうちに学ぶことができよかったです」(駒田さん)。

「お茶の出し方や、受付などで実際にどのように対応すべきかを学ぶことができました。敬語の使い方もとても勉強になりました。これから目上の方と話す機会は増えると思うので、学んだことを生かしたいです。在学中に準1級に挑戦しましたが、記述式の問題に苦勞して、合格することはできませんでした。これで諦めず、挑戦していきたいです」(山口さん)。

三人とも「ビジネス教養」での学びと、秘書検定の学習を通して多くのことを得たようだ。進学を選んだ三人は、それぞれの場所で専門性の高い勉学に励んでいる。社会人になるまであと数年あるが、既に社会に出る意識は高い。

## 販売実習で培う ビジネス社会の感覚

商業科の取り組みは「ビジネス教養」に限らない。社会人として必要な知識やマナーは流通科学コース2、3年生対象の必修科目「販売実習」でも身に付けることができる。

年に数回、校内や地元の商店街で開催される販売実習では、毎回ではないが、商品の仕入れから、価格、販売、会計までを生徒に任せている。

担当の藤原絵理香先生は、同科目の狙いについてこう話す。

「商品売るだけでなく、商品を選び仕入れるところから行うことで、生徒たちは『物を売るのには、こんなに大変だったのか』といった気付きを得ます。こうした体験学習を通じて、普段学習している流通に関する知識を生かし、実践力とビジネス社会の感覚を養ってほしいと考えています」。

販売実習のほかに、実践力の習得に向けた新科目が平成27年度からスタートした。その名も「アントレプレナーチャレンジ」。商業科2年生の必修科目で、商店街の空き店舗を利用して「淀商モール」を運営する。販売実習に近い内容で、実習が多く予定されている。「生徒が自主的に動けるようにサポートしたい」と末澤先生は張り切っている。

今回ご登場いただいた先生方は、校内にとどまらず、対外的にも新たなチャレンジをしている。毎年、社会福祉法人大阪児童福祉事業協会のアフターケア事業部が行う「ソーシャル・スキル・トレーニング」で、「ビジネスマナー」の講演会を行っている。児童福祉施設で育った児童が主な対象で、内容は名刺交換やお辞儀、電話応対など、入所児童が自立できるように、社会



昨年12月にサンリバー柏里商店街で実施された「販売実習」。商店街は地元の人であふれかえった。「淀商のイベントは地元の人に大変人気です」と大西校長は笑顔で話す



で求められるマナーや社会常識の指導が中心だ。先生方のこうした活動は、生徒にもよい影響を与えているに違いない。

森山先生は最後に、今後の決意をこう語った。「本校の卒業生が社会に出たとき、個々の力を発揮して活躍してくれることが、教職員の願いであり目標です。そして『淀商の生徒はさすがや』と言ってもらえる人材になってほしい。それを実現するために、我々教職員も指導のスキルを上げていかなければいけないと思っています」。